

Notes on the paper ‘Sparse bounds for spherical maximal functions’ by Michael T. Lacey

宮地晶彦

2018年2月18日, 名古屋大学での勉強会

1 Introduction

表題の論文は arXiv:1702.08594v4 [math.CA] 8 May 2017 にある.

定義. 以下に出てくる f, g は \mathbb{R}^n 上の非負の Borel 可測関数, cube は \mathbb{R}^n の cube とする.

(1) \mathbb{R}^n の単位球面 $\{|z|=1\}$ 上の $n-1$ 次元面積測度を σ として,

$$A_t f(x) = \int_{|z|=1} f(x-tz) d\sigma(z), \quad 0 < t < \infty,$$

$$M_{\text{lac}} f(x) = \sup_{j \in \mathbb{Z}} A_{2^j} f(x),$$

$$M_{\text{full}} f(x) = \sup_{0 < t < \infty} A_t f(x)$$

と定義する. $M_{\text{lac}} f$ を *lacunary spherical maximal function*, $M_{\text{full}} f$ を *full spherical maximal function* という.

(2) Cube Q と $1 \leq r < \infty$ に対して

$$\langle f \rangle_{Q,r} = \left(\frac{1}{|Q|} \int_Q f(x)^r dx \right)^{1/r}.$$

(3) Cube の族 \mathcal{S} が *sparse* であるとは, 互いに素な可測集合の族 $\{E_Q\}_{Q \in \mathcal{S}}$ で各 $Q \in \mathcal{S}$ に対して $E_Q \subset Q$ かつ $|E_Q| > \frac{1}{2}|Q|$ となっているものがとれることである.

(4) \mathcal{S} が cube の sparse family で $1 \leq r, s < \infty$ のとき, \mathcal{S} に関する $(r, s)_m$ -sparse form とは, 互いに素な可測集合の族 $\{F_Q\}_{Q \in \mathcal{S}}$ で各 $Q \in \mathcal{S}$ に対して $F_Q \subset Q$ なるものを用いて

$$\Lambda_{\mathcal{S},r,s,m}(f, g) = \sum_{Q \in \mathcal{S}} |Q| \langle f \rangle_{Q,r} \langle g \mathbf{1}_{F_Q} \rangle_{Q,s}$$

と表される式のことである. $|F_Q|$ に対して制限はおかない. また

$$\Lambda_{\mathcal{S},r,s}(f, g) = \sum_{Q \in \mathcal{S}} |Q| \langle f \rangle_{Q,r} \langle g \rangle_{Q,s}$$

を sparse family \mathcal{S} に関する (r, s) -sparse form と言う.

T が非負 Borel 可測関数を非負 Borel 可測関数にうつす作用素で $1 \leq r, s < \infty$ のとき, 作用素 T が, もしくは form $\langle Tf, g \rangle = \int Tf(x)g(x) dx$ が, $(r, s)_m$ -sparse bound を持つと言うのは, すべての非負 Borel 可測関数 f, g に対して cube の sparse family \mathcal{S} が存在して

$$\langle Tf, g \rangle \leq C \Lambda_{\mathcal{S},r,s,m}(f, g)$$

が成り立つことである。ここで C は f, g に依存しない定数であるが, sparse family \mathcal{S} と $\Lambda_{\mathcal{S},r,s,m}(f,g)$ の中の族 $\{F_Q\}$ は f, g に依存してよい。以下の定理では関数 f, g にコンパクト台で有界であるなどの制限を付ける。上の $\Lambda_{\mathcal{S},r,s,m}(f,g)$ を $\Lambda_{\mathcal{S},r,s}(f,g)$ で置き換えた評価は (r, s) -sparse bound と言う。

作用素 T が $1/r + 1/s > 1$ なる $1 \leq r, s < \infty$ について (r, s) -sparse bound を持てば, s' を s の共役指数 ($1/s + 1/s'$ で定まる指数) として, $r < p < s'$ の範囲の p に対して L^p 有界性 $\|Tf\|_{L^p} \lesssim \|f\|_{L^p}$ が成り立つ。さらに Muckenhoupt の A_p クラスと逆 Hölder クラスの言葉で記述される適当なクラスの重み w について重み付き有界性 $\|Tf\|_{L^p(w)} \leq C_w \|f\|_{L^p(w)}$ が成り立つことも知られている (Bernicot-Frey-Petermichl, 表題論文の Theorem G, p. 18)。

表題の Lacey の論文は, M_{lac} と M_{full} が或る範囲の r, s に対して $(r, s)_m$ -sparse bound を持つことを示し, さらにその r, s の範囲が境界を除いて sharp な範囲であることも示している。

表題論文の定理から, sparse bound から重み付き不等式を導く一般論により, M_{lac} と M_{full} に対する重み付き不等式が得られる。その重み付き不等式は, A_p クラスの言葉で記述される或るクラスの重みを用いて Cowling–Garcia–Cuerva–Gunawan が与えていた評価を改善するものである。Lacey は, 表題論文の sparse bound から導かれる M_{lac} と M_{full} の A_p クラスと逆 Hölder クラスの重みに関する重み付き不等式は, そのようなクラスでは sharp なものだと ‘suspect’ できると書いている (論文 p. 3, 下から 14–11 行) が, そのはっきりした主張や証明は与えていない。

べきの重み $w(x) = |x|^\alpha$ に関する M_{lac} と M_{full} の重み付き評価は Duoandikoetxea と Vega によって詳細に調べられている。Lacey の表題論文の sparse bound から導かれる結果は, べきの重みに対する Duoandikoetxea–Vega の結果のすべてはカバーできない, とのことである (論文 p. 17, Theorem E の直後)。

Lacey は, M_{lac} と M_{full} の重み付き評価においては A_p クラスの重みは適当なものではないと書いている (論文 p. 14 の下から 4–1 行, p. 17 の Theorem E の後のパラグラフ)。

表題の論文の定理の証明は, 説明が簡潔にすぎるところがあるようなので, 次の節で M_{lac} の $(r, s)_m$ -sparse bound を与える定理 (Theorem 1.2, p. 2) の証明を, 少し改変して詳しく書いてみる。 M_{full} の $(r, s)_m$ -sparse bound の証明も同じ方法でなされるが, それは本文を参照していただきたい。

2 M_{lac} の $(r, s)_m$ -sparse bound の証明

2.1 定理と補題

定理 1 (Theorem 1.2, p. 2). $n \geq 2$ で, 座標平面の 3 点 $(0, 0)$, $(1, 0)$, $(n/(n+1), n/(n+1))$ を頂点とする閉三角形領域を L_n とし, $1 < r, s < \infty$ かつ $(1/r, 1/s)$ が L_n の内部にあると仮定する。このとき, コンパクト台をもつ非負の有界 Borel 可測関数 f, h に対して $\langle M_{\text{lac}} f, h \rangle$ は $(r, s)_m$ -sparse bound を持つ, すなわち, 任意のコンパクト台の非負の有界 Borel 可測関数 f, h に対して, cube の sparse family \mathcal{S} と互いに素な可測集合族 $\{F_Q\}_{Q \in \mathcal{S}}$, $F_Q \subset Q$, が存在して

$$\langle M_{\text{lac}} f, h \rangle \leq C \sum_{Q \in \mathcal{S}} |Q| \langle f \rangle_{Q,r} \langle h \mathbf{1}_{F_Q} \rangle_{Q,s} \quad (1)$$

が成り立つ。 C は n, r, s のみに依存する定数である。

証明には次の補題を用いる。

補題 1 (A_1 の L^p -improving property; Littman, Strichartz; Theorem C, p. 4). $n \geq 2$ で L_n を定理 1 の閉三角形領域とし,

$$L'_n = \{(1/p, 1/q) \mid (1/p, 1/q') \in L_n\}$$

とすると, $1 \leq p, q \leq \infty$ かつ $(1/p, 1/q) \in L'_n$ なる (p, q) に対して $\|A_1\|_{L^p \rightarrow L^q} < \infty$.

補題 2 (A_1 の continuity property; Theorem 2.1, p. 4). $n \geq 2$ で, $(1/p, 1/q)$ が補題 1 の L'_n の内部にあるような $1 < p, q < \infty$ に対して, 定数 $\eta = \eta(n, p, q) > 0$ があって

$$\|A_1 - \tau_y A_1\|_{L^p \rightarrow L^q} \lesssim |y|^\eta, \quad y \in \mathbb{R}^n.$$

ただし τ_y は $\tau_y f(x) = f(x - y)$ で定義される平行移動作用素である.

補題 2 から変数変換で次の系が得られる.

補題 3 (A_t の continuity property; Lemma 2.3, p. 5). (p, q) は補題 2 と同じ条件をみたすとし, η を補題 2 の定数とすると, すべての $0 < t < \infty$ とすべての $y \in \mathbb{R}^n$ に対して

$$\|A_t - \tau_y A_t\|_{L^p \rightarrow L^q} \lesssim \left(\frac{|y|}{t}\right)^\eta t^{-n/p+n/q}.$$

2.2 定理 1 の証明

n, r, s は定理 1 の仮定をみたすものとする.

\mathbb{R}^n の shifted dyadic cube の全体を $\mathcal{D}_{\text{shift}}$ とする. $\mathcal{D}_{\text{shift}}$ は 3^n 個の dyadic grid \mathcal{D}^a , $a \in \{0, 1, 2\}^n$, の合併である. $\mathcal{D}_{\text{shift}}$, \mathcal{D}^a の立方体で辺長が 2^j であるもの全体をそれぞれ $\mathcal{D}_{\text{shift}}(2^j)$, $\mathcal{D}^a(2^j)$ と書く. 任意にひとつ $j \in \mathbb{Z}$ をとったとき, $Q \in \mathcal{D}_{\text{shift}}(2^j)$ に対する $\frac{1}{3}Q$ の全体は \mathbb{R}^n の分割となるから, \mathbb{R}^n 上の関数 f は

$$f = \sum_{a \in \{0, 1, 2\}^n} \sum_{Q \in \mathcal{D}^a(2^j)} f \mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q}$$

と分解できる. 上のように 2^j サイズの cube で分解した f に $A_{2^{j-2}}$ を作用させると

$$A_{2^{j-2}} f = \sum_{a \in \{0, 1, 2\}^n} \sum_{Q \in \mathcal{D}^a(2^j)} A_{2^{j-2}}(f \mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q})$$

であるが, この $A_{2^{j-2}}(f \mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q})$ は Q の外で 0 となる. したがって Lacunary maximal function $M_{\text{lac}} f$ について

$$\begin{aligned} M_{\text{lac}} f &= \sup_{j \in \mathbb{Z}} A_{2^{j-2}} f = \sup_{j \in \mathbb{Z}} \sum_a \sum_{Q \in \mathcal{D}^a(2^j)} A_{2^{j-2}}(f \mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q}) \\ &\leq \sum_a \sup_{j \in \mathbb{Z}} \sup_{Q \in \mathcal{D}^a(2^j)} A_{2^{j-2}}(f \mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q}) \leq \sum_a \sup_{Q \in \mathcal{D}^a} A_{\ell(Q)/4}(f \mathbf{1}_{\frac{1}{2}Q}) \end{aligned}$$

が成り立つ. 最後のところで, 後の都合で $\frac{1}{3}Q$ を $\frac{1}{2}Q$ に変えた. 線形作用素 \tilde{A}_Q を

$$\tilde{A}_Q f = A_{\ell(Q)/4}(f \mathbf{1}_{\frac{1}{2}Q}) \tag{2}$$

で定義すると,

$$M_{\text{lac}} f \leq \sum_a \sup_{Q \in \mathcal{D}^a} \tilde{A}_Q f$$

となる. $\tilde{A}_Q f$ の定義から

$$\tilde{A}_Q f = \mathbf{1}_Q \tilde{A}_Q(f \mathbf{1}_Q), \tag{3}$$

が成り立つことに注意しよう.

M_{lac} に対して sparse bound (1) を示すには、各 $a \in \{0, 1, 2\}^n$ について sparse bound

$$\left\langle \sup_{Q \in \mathcal{D}^a} \tilde{A}_Q f, h \right\rangle \leq C \sum_{Q \in \mathcal{S}} |Q| \langle f \rangle_{Q,r} \langle h \mathbf{1}_{F_Q} \rangle_{Q,s}$$

を示せばよい。

さらに、 j_0 を十分大きな整数とし、上の不等式の左辺にある $\sup_{Q \in \mathcal{D}^a}$ を $\ell(Q) \leq 2^{j_0}$ なる $Q \in \mathcal{D}^a$ に制限した \sup で置き換えたものに対して、 j_0 によらない定数 C で sparse bound を示しておけば十分である。コンパクト台の関数 f が与えられたとき、 j_0 を十分に大きくとって $\text{supp } f$ を辺長 2^{j_0} の 2^n 個の cubes $Q_1, \dots, Q_{2^n} \in \mathcal{D}^a$ で被覆しておけば、辺長 2^{j_0} 以下の \mathcal{D}^a の cube で $\text{supp } f$ と交わるものは Q_1, \dots, Q_{2^n} のいずれかに含まれるものだけだから、

$$\left\langle \sup_{\substack{Q \in \mathcal{D} \\ \ell(Q) \leq 2^{j_0}}} \tilde{A}_Q f, h \right\rangle = \sum_{\nu=1}^{2^n} \left\langle \sup_{\substack{Q \in \mathcal{D} \\ Q \subset Q_\nu}} \tilde{A}_Q f, h \right\rangle$$

となる。右辺の各項の sparse bound を示せばよい。

そこで以下では、 $a \in \{0, 1, 2\}^n$ をひとつ固定して $\mathcal{D} = \mathcal{D}^a$ と略記し、ひとつの $Q_0 \in \mathcal{D}$ をとって、 $(r, s)_m$ -sparse bound

$$\left\langle \sup_{\substack{Q \in \mathcal{D} \\ Q \subset Q_0}} \tilde{A}_Q f, h \right\rangle \leq C \sum_{Q \in \mathcal{S}} |Q| \langle f \rangle_{Q,r} \langle h \mathbf{1}_{F_Q} \rangle_{Q,s} \quad (4)$$

を示す。 C は n, r, s にのみ依存する定数である。以下では \mathcal{D} の立方体を単に 2 進立方体と呼ぶ。

$C_0 > 1$ を十分に大きくとり、2 進立方体 $P \subset Q_0$ で $\langle f \rangle_{P,r} > C_0 \langle f \rangle_{Q_0,r}$ をみたすもののうち包含関係について極大なもの全体を \mathcal{B} とする。 \mathcal{B} は互いに素な 2 進立方体の集合で、 C_0 を十分に大きくとれば $\sum_{P \in \mathcal{B}} |P| < \frac{1}{2} |Q_0|$ が成り立つ。 C_0 はこれが成り立つようにとって固定しておく。

集合 E_{Q_0} を

$$E_{Q_0} = Q_0 \setminus \bigcup_{P \in \mathcal{B}} P \quad (5)$$

と定義すると

$$|E_{Q_0}| > \frac{1}{2} |Q_0| \quad (6)$$

となる。

Q_0 に含まれる 2 進立方体を

$$\begin{aligned} \mathcal{G} &= \{Q \in \mathcal{D} \mid Q \subset Q_0, \text{ すべての } P \in \mathcal{B} \text{ に対して } Q \not\subset P\}, \\ \mathcal{R} &= \{Q \in \mathcal{D} \mid Q \subset Q_0, \text{ 或る } P \in \mathcal{B} \text{ に対して } Q \subset P\} \end{aligned}$$

と 2 つに分け、集合 F_{Q_0} を

$$F_{Q_0} = \{x \in Q_0 \mid \sup_{Q \in \mathcal{G}} \tilde{A}_Q f(x) \geq \sup_{Q \in \mathcal{R}} \tilde{A}_Q f(x)\} \quad (7)$$

と定義する。 $\sup_{Q \in \mathcal{R}} \tilde{A}_Q f(x)$ は $\bigcup_{P \in \mathcal{B}} P$ の外では 0 であるから、

$$E_{Q_0} \subset F_{Q_0} \subset Q_0 \quad (8)$$

である.

F_{Q_0} の定義と (3) から

$$\begin{aligned} \left\langle \sup_{Q \in \mathcal{D}, Q \subset Q_0} \tilde{A}_Q f, h \right\rangle &= \left\langle \sup_{Q \in \mathcal{G}} \tilde{A}_Q f, h \mathbf{1}_{F_{Q_0}} \right\rangle + \left\langle \sup_{Q \in \mathcal{R}} \tilde{A}_Q f, h \mathbf{1}_{F_{Q_0}^c} \right\rangle \\ &= \left\langle \sup_{Q \in \mathcal{G}} \tilde{A}_Q f, h \mathbf{1}_{F_{Q_0}} \right\rangle + \sum_{P \in \mathcal{B}} \left\langle \sup_{Q \in \mathcal{D}, Q \subset P} \tilde{A}_Q f, h \mathbf{1}_{F_{Q_0}^c} \right\rangle \end{aligned}$$

が成り立つ ($F_{Q_0}^c$ は F_{Q_0} の補集合). 以下で上の等式の右辺第 1 項に対して

$$\left\langle \sup_{Q \in \mathcal{G}} \tilde{A}_Q f, h \mathbf{1}_{F_{Q_0}} \right\rangle \leq C |Q_0| \langle f \rangle_{Q_0, r} \langle h \mathbf{1}_{F_{Q_0}} \rangle_{Q_0, s} \quad (9)$$

を示す. これが示されたら, 上の等式と合わせて

$$\left\langle \sup_{Q \in \mathcal{D}, Q \subset Q_0} \tilde{A}_Q f, h \right\rangle \leq C |Q_0| \langle f \rangle_{Q_0, r} \langle h \mathbf{1}_{F_{Q_0}} \rangle_{Q_0, s} + \sum_{P \in \mathcal{B}} \left\langle \sup_{Q \in \mathcal{D}, Q \subset P} \tilde{A}_Q f, h \mathbf{1}_{F_{Q_0}^c} \right\rangle \quad (10)$$

が成り立つことになる.

(5)–(9) の構成を, Q_0 を P で置き換えて, (10) の右辺の \sum_P の各項に対して行う. 初めの \mathcal{B} を $\mathcal{B}(Q_0)$ と書き, P に対応する \mathcal{B} は $\mathcal{B}(P)$ と書くと,

$$\begin{aligned} \left\langle \sup_{Q \in \mathcal{D}, Q \subset Q_0} \tilde{A}_Q f, h \right\rangle &\leq C |Q_0| \langle f \rangle_{Q_0, r} \langle h \mathbf{1}_{F_{Q_0}} \rangle_{Q_0, s} + \sum_{P \in \mathcal{B}(Q_0)} C |P| \langle f \rangle_{P, r} \langle h \mathbf{1}_{F_{Q_0}^c} \mathbf{1}_{F_P} \rangle_{P, s} \\ &\quad + \sum_{P \in \mathcal{B}(Q_0)} \sum_{P' \in \mathcal{B}(P)} \left\langle \sup_{Q \in \mathcal{D}, Q \subset P'} \tilde{A}_Q f, h \mathbf{1}_{F_{Q_0}^c} \mathbf{1}_{F_{P'}} \right\rangle \end{aligned}$$

となる. C は (10) の中と同じ C である. これを繰り返せば最終的に (4) の形の sparse bound が得られる.

\mathcal{B} と \mathcal{G} の定義から

$$Q \in \mathcal{G} \Rightarrow \langle f \rangle_{Q, r} \leq C_0 \langle f \rangle_{Q_0, r}, \quad (11)$$

$$P \in \mathcal{B}, Q \in \mathcal{G}, P \cap Q \neq \emptyset \Rightarrow P \subsetneq Q \quad (12)$$

が成り立つことに注意しておく.

不等式 (9) を示そう. 以下では記号の簡略化のため

$$\langle f \rangle_{Q_0, r} = 1$$

と仮定する. また $h \mathbf{1}_{F_{Q_0}}$ を単に h と書く. 示すべき不等式は

$$\left\langle \sup_{Q \in \mathcal{G}} \tilde{A}_Q f, h \right\rangle \leq C |Q_0| \langle h \rangle_{Q_0, s} \quad (13)$$

である.

これを示すためにまず $\sup_{Q \in \mathcal{G}} \tilde{A}_Q f$ を線形化する. すなわち, f をひとつ固定すると, 互いに素な可測部分集合族 $\{G_Q\}_{Q \in \mathcal{G}}$ ですべての x で

$$\sum_{Q \in \mathcal{G}} \tilde{A}_Q f(x) \mathbf{1}_{G_Q}(x) \geq \frac{1}{2} \sup_{Q \in \mathcal{G}} \tilde{A}_Q f(x)$$

をみたすものがとれる。 $\tilde{A}_Q f$ は Q の外では 0 だから $G_Q \subset Q$ としてよい。 (13) の代わりに線形作用素 $\varphi \mapsto \sum_{Q \in \mathcal{G}} (\tilde{A}_Q \varphi) \mathbf{1}_{G_Q}$ に対して、 $\{G_Q\}_{Q \in \mathcal{G}}$ の取り方によらない評価

$$\left\langle \sum_{Q \in \mathcal{G}} (\tilde{A}_Q f) \mathbf{1}_{G_Q}, h \right\rangle = \sum_{Q \in \mathcal{G}} \langle \tilde{A}_Q f, h \mathbf{1}_{G_Q} \rangle \leq C |Q_0| \langle h \rangle_{Q_0, s} \quad (14)$$

を示せばよい。

次に f を Calderón-Zygmund 分解する。ここでは通常 Calderón-Zygmund 分解を少し変形して、各 $P \in \mathcal{B}$ に対して、 P を辺長が半分の 2 進立方体に分割したものを

$$P = \bigcup_{i=1}^{2^n} P_i$$

として

$$b_P = \sum_{i=1}^{2^n} \left(f - \langle f \rangle_{P_i, 1} \right) \mathbf{1}_{P_i}$$

と定義し、

$$f = g + b, \quad b = \sum_{P \in \mathcal{B}} b_P, \quad g = f \mathbf{1}_{E_{Q_0}} + \sum_{P \in \mathcal{B}} \sum_{i=1}^{2^n} \langle f \rangle_{P_i, 1} \mathbf{1}_{P_i}$$

とする。不等式 (14) の f を g と b で置き換えた不等式を示せばよい。

各 $P \in \mathcal{B}$ に対して

$$\langle b_P \rangle_{P, r} \lesssim \langle f \rangle_{P, r} \lesssim 1 \quad (15)$$

が成り立ち、 g について

$$\|g\|_{L^\infty} \lesssim 1$$

が成り立つ。また、 $P \in \mathcal{B}$ で Q が $P \subsetneq Q$ なる 2 進立方体ならば、 $P \cap \frac{1}{2}Q$ は或る P_i か P 自身か \emptyset かのいずれかに等しく、 b_P は各 P_i について $\int_{P_i} b_P(x) dx = 0$ が成り立つように作ったので、 (12) と合わせて、

$$P \in \mathcal{B}, Q \in \mathcal{G}, P \cap Q \neq \emptyset \Rightarrow \int b_P(x) \mathbf{1}_{\frac{1}{2}Q}(x) dx = 0 \quad (16)$$

という cancellation が成り立つ。

Good part g に関する評価。 (14) の f を g で置き換えたものについては、 $\tilde{A}_Q g \leq \|g\|_{L^\infty} \lesssim 1$ で $\{G_Q\}$ が互いに素であるから、

$$\sum_{Q \in \mathcal{G}} \langle \tilde{A}_Q g, h \mathbf{1}_{G_Q} \rangle \lesssim \sum_{Q \in \mathcal{G}} \int_{G_Q} h(x) dx \leq \int_{Q_0} h(x) dx \leq |Q_0| \langle h \rangle_{Q_0, s}$$

となる。

Bad part $b = \sum_P b_P$ に関する評価。 (14) の f を b で置き換えたものを

$$(\star) = \sum_{Q \in \mathcal{G}} \langle \tilde{A}_Q b, h \mathbf{1}_{G_Q} \rangle$$

と書く。 A_t の双対作用素 A_t^* を使って (実は $A_t^* = A_t$ だが A_t^* と書いておく)、

$$(\star) = \sum_{Q \in \mathcal{G}} \sum_{P \in \mathcal{B}} \langle \tilde{A}_Q b_P, h \mathbf{1}_{G_Q} \rangle$$

$$= \sum_{Q \in \mathcal{G}} \sum_{P \in \mathcal{B}} \langle A_{\ell(Q)/4}(b_P \mathbf{1}_{\frac{1}{2}Q}), h \mathbf{1}_{G_Q} \rangle = \sum_{Q \in \mathcal{G}} \sum_{P \in \mathcal{B}} \langle b_P \mathbf{1}_{\frac{1}{2}Q}, A_{\ell(Q)/4}^*(h \mathbf{1}_{G_Q}) \rangle$$

と書けるから, cancellation (16) によって,

$$(\star) = \sum_{Q \in \mathcal{G}} \sum_{P \in \mathcal{B}} \int b_P(x) \mathbf{1}_{\frac{1}{2}Q}(x) \{A_{\ell(Q)/4}^*(h \mathbf{1}_{G_Q})(x) - A_{\ell(Q)/4}^*(h \mathbf{1}_{G_Q})(x')\} dx$$

と書ける. 上の x' は任意の点でよい. x' を P 内で動かして平均し, $x' = x + y$ と変数変換して書き直すと,

$$\begin{aligned} (\star) &= \sum_{Q \in \mathcal{G}} \sum_{P \in \mathcal{B}} \frac{1}{|P|} \iint b_P(x) \mathbf{1}_{\frac{1}{2}Q}(x) \mathbf{1}_P(x') \{A_{\ell(Q)/4}^*(h \mathbf{1}_{G_Q})(x) - A_{\ell(Q)/4}^*(h \mathbf{1}_{G_Q})(x')\} dx dx' \\ &= \sum_{Q \in \mathcal{G}} \sum_{P \in \mathcal{B}} \frac{1}{|P|} \iint b_P(x) \mathbf{1}_{\frac{1}{2}Q}(x) \mathbf{1}_P(x+y) \{A_{\ell(Q)/4}^*(h \mathbf{1}_{G_Q})(x) - A_{\ell(Q)/4}^*(h \mathbf{1}_{G_Q})(x+y)\} dx dy \end{aligned}$$

となる. P と同じ辺長をもち 0 を中心とする立方体を P_0 と書くと, 被積分関数 $b_P(x) \mathbf{1}_P(x+y)$ が 0 でないのは $y \in 2P_0$ のときだけだから, 上の y に関する積分は $y \in 2P_0$ でとればよい. \mathcal{B} の立方体で辺長が 2^j であるもの全体を $\mathcal{B}(2^j)$ と書き, 0 を中心とし辺長 2^j の立方体を $P_0(2^j)$ と書くと, 上の等式より

$$\begin{aligned} (\star) &= \sum_{k=1}^{\infty} \sum_{Q \in \mathcal{G}} \sum_{P \in \mathcal{B}(2^{-k}\ell(Q))} \frac{1}{|P_0(2^{-k}\ell(Q))|} \\ &\quad \iint b_P(x) \mathbf{1}_{\frac{1}{2}Q}(x) \mathbf{1}_P(x+y) \{A_{\ell(Q)/4}^*(h \mathbf{1}_{G_Q})(x) - A_{\ell(Q)/4}^*(h \mathbf{1}_{G_Q})(x+y)\} dx dy \end{aligned}$$

と書ける. この y の積分範囲は $y \in 2P_0(2^{-k}\ell(Q))$ でよい. この最後の等式から Hölder 不等式を用いて

$$\begin{aligned} |(\star)| &\lesssim \sum_{k=1}^{\infty} \sum_{Q \in \mathcal{G}} \left\| \sum_{P \in \mathcal{B}(2^{-k}\ell(Q))} |b_P| \right\|_{L^r(Q)} \\ &\quad \times \sup_{y \in 2P_0(2^{-k}\ell(Q))} \left\| A_{\ell(Q)/4}^*(h \mathbf{1}_{G_Q})(x) - A_{\ell(Q)/4}^*(h \mathbf{1}_{G_Q})(x+y) \right\|_{L_{x'}^{r'}(Q)} \end{aligned} \quad (17)$$

と評価できる.

(17) 中の $L_{x'}^{r'}(Q)$ ノルムを評価するのに補題 3 を用いる. $(1/r, 1/s)$ が L_n の内部にあるとき, $(1/r, 1/s')$ は L'_n の内部にあり, 補題 3 によって

$$\begin{aligned} &\left\| A_{\ell(Q)/4}^*(h \mathbf{1}_{G_Q})(x) - A_{\ell(Q)/4}^*(h \mathbf{1}_{G_Q})(x+y) \right\|_{L_{x'}^{r'}(Q)} \\ &\leq \left\| A_{\ell(Q)/4}^* - \tau_{-y} A_{\ell(Q)/4}^* \right\|_{L^s \rightarrow L^{r'}} \|h \mathbf{1}_{G_Q}\|_{L^s} \\ &= \left\| A_{\ell(Q)/4} - A_{\ell(Q)/4} \tau_y \right\|_{L^r \rightarrow L^{s'}} \|h \mathbf{1}_{G_Q}\|_{L^s} \\ &\lesssim 2^{-k\eta} |Q|^{1-1/r-1/s} \|h \mathbf{1}_{G_Q}\|_{L^s}, \quad y \in 2P_0(2^{-k}\ell(Q)), \end{aligned}$$

が成り立つ. ゆえに (17) より

$$|(\star)| \lesssim \sum_{k=1}^{\infty} \sum_{Q \in \mathcal{G}} \left\| \sum_{P \in \mathcal{B}(2^{-k}\ell(Q))} |b_P| \right\|_{L^r(Q)} 2^{-k\eta} |Q|^{1-1/r-1/s} \|h \mathbf{1}_{G_Q}\|_{L^s} \quad (18)$$

が成り立つ。

そこで (14) の f を b で置き換えた不等式を示すためには, $k \in \mathbb{N}$ に関して一様の評価

$$\sum_{Q \in \mathcal{G}} \left\| \sum_{P \in \mathcal{B}(2^{-k}\ell(Q))} |b_P| \right\|_{L^r(Q)} |Q|^{1-1/r-1/s} \|h \mathbf{1}_{G_Q}\|_{L^s} \lesssim |Q_0|^{1-1/s} \|h\|_{L^s(Q_0)} \quad (19)$$

を示せばよい。

評価 (19) を示すには $(1/r, 1/s)$ が L_n の内部にあるという条件は不要で, $1/r + 1/s \geq 1$ であることだけ使えばよい. 一般に $1 \leq q \leq r'$ なるすべての q に対して

$$\sum_{Q \in \mathcal{G}} |Q|^{1-1/r-1/q} \left\| \sum_{P \in \mathcal{B}(2^{-k}\ell(Q))} |b_P| \right\|_{L^r(Q)} \|h \mathbf{1}_{G_Q}\|_{L^q} \lesssim |Q_0|^{1-1/q} \|h\|_{L^q(Q_0)} \quad (20)$$

が言える. これを示すには, 補間により $q = 1$ と $q = r'$ の 2 つについて (20) を示せばよい.

$q = 1$ の場合の (20). $P \in \mathcal{B}$ が互いに素であることと (12), (15), (11) により, 各 $Q \in \mathcal{G}$ について

$$\begin{aligned} \left\| \sum_{P \in \mathcal{B}(2^{-k}\ell(Q))} |b_P| \right\|_{L^r(Q)} &= \left(\sum_{\substack{P \in \mathcal{B}(2^{-k}\ell(Q)) \\ P \not\subseteq Q}} \int_P |b_P(x)|^r dx \right)^{1/r} \\ &\lesssim \left(\sum_{\substack{P \in \mathcal{B}(2^{-k}\ell(Q)) \\ P \not\subseteq Q}} \int_P f(x)^r dx \right)^{1/r} \leq \left(\int_Q f^r dx \right)^{1/r} \lesssim |Q|^{1/r} \end{aligned}$$

が成り立つ. ゆえに

$$(q = 1 \text{ の (20) の左辺}) \lesssim \sum_{Q \in \mathcal{G}} \|h \mathbf{1}_{G_Q}\|_{L^1(Q)} \leq \|h\|_{L^1(Q_0)}$$

となる. 最後の \leq で $\{G_Q\}$ が互いに素であることを使った.

$q = r'$ の場合 (20). Hölder 不等式と (12) と \mathcal{B} が互いに素な族であることから,

$$\begin{aligned} &(q = r' \text{ の (20) の左辺}) \\ &\leq \left(\sum_{Q \in \mathcal{G}} \sum_{\substack{P \in \mathcal{B}(2^{-k}\ell(Q)) \\ P \not\subseteq Q}} \int |b_P(x)|^r dx \right)^{1/r} \left(\sum_{Q \in \mathcal{G}} \int h(x)^{r'} \mathbf{1}_{G_Q}(x) dx \right)^{1/r'} \end{aligned}$$

が成り立つ. 右辺第 2 項は $\{G_Q\}$ が互いに素だから $\|h\|_{L^{r'}(Q_0)}$ 以下である. 右辺第 1 項は, k を固定するとき $P \not\subseteq Q$ かつ $\ell(P) = 2^{-k}\ell(Q)$ なる 2 進立方体 Q はただ 1 つしかないから,

$$\begin{aligned} \left(\sum_{Q \in \mathcal{G}} \sum_{\substack{P \in \mathcal{B}(2^{-k}\ell(Q)) \\ P \not\subseteq Q}} \int |b_P(x)|^r dx \right)^{1/r} &\leq \left(\sum_{P \in \mathcal{B}} \int |b_P(x)|^r dx \right)^{1/r} \\ &\lesssim \left(\sum_{P \in \mathcal{B}} \int_P f(x)^r dx \right)^{1/r} \leq \|f\|_{L^r(Q_0)}. \end{aligned}$$

ゆえに

$$(q = r' \text{ の (20) の左辺}) \leq \|f\|_{L^r(Q_0)} \|h\|_{L^{r'}(Q_0)} = |Q_0|^{1-1/r'} \|h\|_{L^{r'}(Q_0)}$$

となる. 定理 1 の証明終わり.

2.3 定理1の証明に関する注意

先の証明では $\frac{1}{3}Q$ を $\frac{1}{2}Q$ で置き換え Calderón-Zygmund 分解の b_P を通常と異なる仕方で作るという技巧を用いたが、別の方法でこの技巧を回避することもできる。

\tilde{A}_Q の定義 (2) を

$$\tilde{A}_Q f = A_{\ell(Q)/4}(f \mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q}) \quad (21)$$

に変更すると、前と同様に各点不等式

$$M_{\text{lac}} f \leq \sum_a \sup_{Q \in \mathcal{D}^a} \tilde{A}_Q f$$

が成り立つ。Calderón-Zygmund 分解 $f = g + b$ を、通常のように

$$b = \sum_{P \in \mathcal{B}} b_P, \\ b_P = (f - \langle f \rangle_{P,1}) \mathbf{1}_P$$

で定義する。 $\mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q}$ をかける作用素を同じ記号 $\mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q}$ で表すと、 $\tilde{A}_Q = A_{\ell(Q)/4} \circ \mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q}$ の双対作用素は

$$\tilde{A}_Q^* = \mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q} \circ A_{\ell(Q)/4}^*$$

となる。(A_t は対称作用素だから右辺の $*$ はなくてもよいが、 M_{full} の評価をするときの参照の便のために書いておく。) \tilde{A}_Q^* を用いて前節の (★) の書き換えをすると、 b_P は cancellation $\int_P b_P(x) dx = 0$ をみたまから、

$$\begin{aligned} (\star) &= \sum_{Q \in \mathcal{G}} \langle \tilde{A}_Q b, h \mathbf{1}_{G_Q} \rangle \\ &= \sum_{Q \in \mathcal{G}} \sum_{P \in \mathcal{B}} \int b_P(x) \{ \mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q}(x) A_{\ell(Q)/4}^*(h \mathbf{1}_{G_Q})(x) - \mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q}(x') A_{\ell(Q)/4}^*(h \mathbf{1}_{G_Q})(x') \} dx \end{aligned}$$

となり、今度は $\mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q}$ にも x' が入る。前のように x' について平均して作用素ノルムで評価しようとする、

$$\begin{aligned} &\left\| \mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q} \circ A_{\ell(Q)/4}^* - \tau_{-y} \circ \mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q} \circ A_{\ell(Q)/4}^* \right\|_{L^s \rightarrow L^{s'}} \\ &= \left\| A_{\ell(Q)/4} \circ \mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q} - A_{\ell(Q)/4} \circ \mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q} \circ \tau_y \right\|_{L^r \rightarrow L^{s'}} = (*) \end{aligned}$$

の評価をする必要がある。(*) $\lesssim (|y|/\ell(Q))^\eta \ell(Q)^{-n/r+n/s'}$ が言えれば前と同じにできる。

(*) の評価に補題3は直接は使えないが、

$$\mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q} \circ \tau_y - \tau_y \circ \mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q} = (\mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q} - \tau_y \mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q}) \circ \tau_y$$

だから

$$\begin{aligned} (*) &\leq \left\| A_{\ell(Q)/4} \circ \mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q} - A_{\ell(Q)/4} \circ \tau_y \circ \mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q} \right\|_{L^r \rightarrow L^{s'}} \\ &\quad + \left\| A_{\ell(Q)/4} \circ (\mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q} - \tau_y \mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q}) \circ \tau_y \right\|_{L^r \rightarrow L^{s'}} \end{aligned} \quad (22)$$

である。右辺の第1の作用素ノルムは補題3により $\lesssim (|y|/\ell(Q))^n \ell(Q)^{-n/r+n/s'}$ と評価できる。第2の作用素ノルムについては、 $1/\tilde{r} > 1/r$ かつ $(1/\tilde{r}, 1/s')$ が L'_n の内点であるような \tilde{r} をひとつとり、 $1/\tilde{r} = 1/r + 1/v$ とすると、

$$\left\| A_{\ell(Q)/4} \circ (\mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q} - \tau_y \mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q}) \circ \tau_y \right\|_{L^r \rightarrow L^{s'}} \leq \left\| A_{\ell(Q)/4} \right\|_{L^{\tilde{r}} \rightarrow L^{s'}} \left\| \mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q} - \tau_y \mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q} \right\|_{L^r \rightarrow L^{\tilde{r}}}$$

であって、この第1項は補題1（を変数変換したもの）により $\lesssim \ell(Q)^{-n/\tilde{r}+n/s'}$ であり、第2項は Hölder 不等式により

$$\left\| \mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q} - \tau_y \mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q} \right\|_{L^r \rightarrow L^{\tilde{r}}} = \left\| \mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q} - \tau_y \mathbf{1}_{\frac{1}{3}Q} \right\|_{L^v} \lesssim \left(\frac{|y|}{\ell(Q)} \right)^{1/v} \ell(Q)^{n/v}$$

だから、(22) の右辺の第2の作用素ノルム $\lesssim (|y|/\ell(Q))^{1/v} \ell(Q)^{-n/r+n/s'}$ である。ゆえに η を $\tilde{\eta} = \min\{\eta, 1/v\}$ で置き換えれば

$$(*) \lesssim \left(\frac{|y|}{\ell(Q)} \right)^{\tilde{\eta}} \ell(Q)^{-n/r+n/s'}$$

が成り立ち、あとは前節と同様にできる。